紹介

山口弥一郎著、石井正己・川島秀一編『津浪と村』

二〇一一年、山口弥一郎『津浪と村』が復刊された。発刊から七〇年を経て発生した東日本大震災の甚大な被害と復興の困難に触れる度に、一九四三年に恒春閣書房より発刊された本書が指摘した「日常生活」の重みを思い知る。復刊にあたった編者の石井正己による「適地の選定・インフラの整備などの前に、経済的基盤を確保し、民俗的感情を理解しなければ失敗することは、山口の研究が証明している（本書五頁）」との指摘は、阪神・淡路大震災の被災地に身を置いてきた評者も大いに共感するところである。

本書は、山口が師事した柳田国男による「津浪と村や家の再興の問題は君の領分であるから、手離さずにやって、心安く読めるような本にでもまとめてみよ（一三頁）」との言葉を受けて書かれた。昭和三陸地震（一九三三年）の二年後から三陸の津波被災地調査を開始し、聞き書きと集落移動の記録を続けた山口の研究動機は、「移転して完全に災害を免れたと言う明るい話（五〇頁）」を探し求め、「次の津浪で一人でも多くの生命を救（一四頁）」うことにあった。

『津浪と村』の構成は次の通りである。第一篇「津浪と村の調査記録」は、三陸の村々を訪ね歩いた取材記録のように書かれている。訪れた集落の地誌や郷土史的な記述に、聞き取りによる津波災害の体験談を加え、復興や防災の個別事例を丁寧に紹介する。高台移転を果たした集落の見取り図も複数掲載されており、東日本大震災以後、多くの研究者やメディアから参照されている。第二篇「村々の復興」は、第一篇で示された事例を元に津波後の集落移動を整理し、生業や地形的な分類から集落移動を類型化した地理学的考察が中心となっている。これは山口が師事した地理学者田中舘秀三との共同研究の成果とされる。第三篇「家の再興」は、家系の復興や生業の再開が居住地移動や原地復帰と深く関連している点について詳論している。津波によって家族が全員亡くなった後に、遠縁の者や隣村の若者を相続者として家督を引き継がせ、家を復興させる事例が興味深い。なお復刊版には、一九六〇年のチリ地震の際に新聞に寄稿し津波防災を喚起した「津波で移る村の話」等が加えられている。

山口弥一郎を評す際、しばしば「地理学と民俗学の狭間に生きた」（本書帯）等の解説がなされる。「山口弥一郎の地理学」（一橋論叢、一一四巻三号、一九九五年）において竹内啓一は、一度高台に移転した三陸の津波被災者が原住地に「なぜ戻ってきてしまうかは、地理学ではもはや解けない」との山口の言葉を紹介している。山口は、聞き書きなどを通じて得られる「郷土意識」にその問題を解く鍵があると考えていた。本書から山口が着目した「郷土意識」の全体像を捕捉することは容易ではないが、原住地での屋敷神や氏神の祭祀、住み慣れた土地への愛着、漁業を中心とした生業の復興などを包括した視点であることが窺える。数十年に一度襲来する津波の恐怖と、日常生活の積み重ねの間に厳しい葛藤があり、その均衡点を左右する要因として民俗や生業に着目する山口の問題意識は、今なお色褪せることはない。

高台移転の阻害要因や原地復帰の契機を指摘し、「なぜ戻ってきてしまうのか」と警鐘を鳴らす本書の意義は、人はどこでどのように生き、どのように命を守るべきなのかという問いについて、生活者の視点から問い続けたところにある。居住空間と社会や文化の関わりに関心を寄せる地理学においても、今改めて山口の問題意識を真摯に受け止めたい。

（B5判　二五七頁　二〇一一年六月　三弥井書店　税別一八〇〇円）

（相澤亮太郎　甲南女子大学人間科学部講師）

会　告

二〇一二年度史学研究会大会および総会は、予定どおり一一月二日（金）午後一時より京都大学文学部第三講義室にて開催されました。

公開講演は、夫馬進、春田晴郎の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終わりました。

東アジア交流史上における
朝鮮洪大容の北京旅行とその後　夫馬　進氏

パルティア史研究から分かること　春田　晴郎氏

なお、大会と総会に先立って開催された定例の理事会・評議員会において、二〇一二年度会務報告がなされました。

二〇一二年度 史学研究会大会講演要旨

東アジア交流史上における朝鮮洪大容の北京旅行とその後

夫馬　進

洪大容（一七三一年から一七八三年）は、韓国では実学思想家として誰もが知っているほど有名である。ところが日本ではおそらく、洪大容という名前も彼の北京旅行記である『乾浄筆譚』も、ほとんど知られていないであろう。しかし『乾浄筆譚』に描かれる三人の中国知識人との交流は、おそらく東アジア交流史という大枠で見てみても空前絶後なまでに親密なものであったと言ってよいし、彼の思想もまた、実学思想という韓国独自の枠組みでは捉えきれないほど興味深いものである。日本でも彼の旅行記と思想とは、もっと知られてしかるべきである。また、彼の思想を従来のような実学思想という枠組みに押し込めてはならない。

洪大容という人物とその思想を理解する